

JRA競走馬総合研究所スタッフが語る

サラブレッド のおはなし

高橋敏之

(JRA競走馬総合研究所)=文
text by Toshiyuki Takahashi

競馬の祭典タービーがもうすぐ東京競馬場で開催されます。東京競馬場の特徴は、長い直線と左回りのコースです。そこで、左回りのコースでも能力を発揮できるかが問題となります。人間は、利き手に左右がありますが、馬はどのようでしょうか。

馬は、人間の利き手とは違いますが、駆歩(キヤンター)や襲歩(ギャロップ)で走っているときには、手前の左右に区別があります。前後の肢で時間的に早く着くものを反手前肢(はんてんぜんけい)後に着くものを手前肢(てんぜんけい)といいます。右手前の駆歩、襲歩では、左後肢・右後肢・左前肢・右前肢の順で着地し、左手前では左右が逆になります。駆歩、襲歩で走っているときには、一番はじめに着く反手前肢が主に推進力を発揮し、手前後肢と反手前肢は体を支え、手前前肢が方向を決めると考えられています。四肢の役割がそれぞれ違うので、手前が左右で違つと、走り方やスピードが違つてくる馬も出てきます。

それでは、なぜ左右両方の手前で馬は走るのでしょうか。駆歩や襲歩では、四肢の役割が違うので動きや筋肉の使い方が異なります。疲れてきたとき左右を入れ替えると、働く筋肉が変わるので少し疲れを減らすことができます。また、馬は直線では、どちらの手前でも走れますが、競馬のように速く走っていると、左(白)カーブを曲がるには左(白)手前で

ウマは右利き？ 左利き？ ウマの手前についてのおはなし

なければうまく曲がるできません。そのため左右の手前で走る必要があるのです。その後、左右カーブを曲がった馬の大部分は、直線を向くと、騎手の指示または自発的にカーブとは反対の手前に手前変換し、勝負所の最後の直線では右(白)手前で走ります。

馬は左右どちらの手前が得意なのでしょうか。左回りの東京と右回りの中山でスタート時の前肢の手前を調べてみたところ、両競馬場とも左右の手前の割合は、概ね半々でした。スタートの時の手前は騎手がコントロールする場面もありますが、馬の手前の選び方に極端な偏りはないようです。その中でも、器用でどちらの手前でも同じように走れる馬もいれば、左右どちらかの手前でしかうまく走れない馬もいるでしょう。どちらかの回りしか好走しないタイプの馬は、左右の手前で走り方に違いがあるのではないかと思います。

ところが、東京競馬場では事態はさらに複雑です。最後の直線が長いので、ゴール前にさらにもう一度手前を替える馬もいるのです。つまり、どちらかの手前でしか、うまく走れない馬でも、何とか実力を発揮できる可能性があるわけです。

手前変換の様子は、4コーナーから直線に変わるところで競馬を見ているとよく見られます。なかなか迫力があるので、是非一度注視してご覧ください。



右回りの中山金杯、左手前でゴールする
アドマイヤフジ

JRA